

## 基本態度

本稿で古事記の担当箇所を訓読・現代語訳するにあたって、本文にない助詞・助動詞等を極力補わず、可能な限り本文にある語だけでよめる訓をあてて訓読文・現代語訳を作成する。

## 訓読文・現代語訳文作成の手続き

訓読文の作成にあたって、本授業のテキストと新日本古典文学全集を比較し、訓みに差異のある語句を取りあげ、それらの語の各注釈書における訓みを確認した。そして、それらの語を時代別国語大辞典で調べ、意味や用法が適切だと思われる語の訓をあてた。そのため、表に挙げられている語句はテキスト―新全集間に差異があるものだけである。全ての注釈書を比較すれば、別の差異が発見されるかもしれない。

現代語訳文は、右に示した手続きで作成した訓読文を現代語に翻訳することで作成した。

## 作成した訓読文

爾、速須佐之男命、其の老夫に詔さく、「是、汝が女は、吾に奉らむや。」答へて白さく、「恐し。亦、御名を覚らず。」爾、答へ詔さく、「吾は天照大御神の伊呂勢者なり。故、今天より降りましぬ。」爾、足名椎・手名椎の神白さく、「然坐さば恐し。立奉らむ。」爾、速須佐之男命、乃ち湯津爪櫛に其の童女を取り成して、御美豆良に刺し、其の其足名椎・手名椎の神に告さく、「汝等、八塩折の酒を醸み、亦垣を作り廻し、其の垣に八門を作り、門毎に八佐受岐を結び、其の佐受岐毎に酒船を置きて、船毎に其の八塩折の酒を盛りて待て。」故、告しし随に、如此設備へて待つ時に、その八俣遠呂智、信に言が如来つ。乃ち船毎に己が頭を垂れ入れ、その酒を飲みき。是に、飲み酔ひて留まり伏し寝ねき。爾、速須佐之男命、其の御佩かせる十拳劔を抜き、その蛇を切り散れば、肥河、血に變りて流れき。故、その中の尾を切りし時、御刀の刃毀れき。爾、怪しく思ひ、御刀の前を以て、刺し割きて見れば、都牟羽の大刀在り。故、此の大刀を取り、異物に思ほして、天照大御神に白し上げき。是は草那藝の大刀なり。

## 作成した現代語訳文

そこで、速須佐之男命がそのおきなに仰るには、「これ、お前の娘を私に謙譲するか。」。答えて申し上げるに、「恐れ多いことです。しかしまた、御名を存じあげません。」。そこで、答えて仰るに、「我は天照大御神の同母の弟である。そして、今、天からお降りなされたのである。」。すると、足名椎・手名椎の神が申し上げるに、「そうおられるのであれば恐れ多いことです。差しあげましょう。」。そこで、速須佐之男命、たちまちその娘を神聖な爪櫛に成して、御髪に刺し、足名椎・手名椎の神にお告げなさるに、「お前たち、八塩折の酒を造り、また、垣を作りめぐらし、その垣に八つの門をつくり、門ごとに八つのさき置いて、船毎にその八塩折の酒を盛って待て。」。そのため言われた通りにして用意をして待つていると、その八俣遠呂智がやはり言った通りやってきて、そしてそれぞれの船にそれぞれの頭を垂れ入れて、酒を飲んでそのまま突っ伏して寝た。そこで、速須佐之男命がご帯刀なさる十拳劔を抜いて、その蛇を切りはらうと、肥の河は血の河に変わって流れている。そして、その蛇の中の尾を切りなされたとき、御刀の刃がこぼれた。そこで、怪しく思いなさり、御刀のさきで蛇を刺し、割いて見れば、ツムハの大刀がある。そして、この大刀をとり、普通でないとお思いになり、天照大御神にご献上なされた。これは、草那藝の大刀である。

## テキスト 担当箇所と訓みの違い表

[illegible]

訓みに違ひがあるもの	テキスト	新全集	思想大系	岩波文庫	集成(新潮社)	古事記注釈	古事記伝	全集
詠	シカシテ	しかくして	しかして	かれ	しかして	爾に	カレ	爾(二)に
汝	のラシシク	のりたまひし	のらさく	詔りたまふ	詔の(らしし	詔りたまひし	ノリタマフ	詔のりたま
汝	ナ	なむち	いまし	汝(いまし)	な	な	イマシ	汝(いまし)
奉	タテマツラム	まつらむ	まつらむ	奉らむ	奉らむ	奉らむ	タテマツラム	奉(たてまつ
吾	アニ	あれに	あれ	吾に	あに	吾(あれ)に	アレニ	吾(あれ)に
刺	ササシテ	刺して	刺さして	刺さして	刺さして	刺(さ)して	ササシテ	刺して
汝等	ナレども	なむちら	いましたち	いましたち	なれども	汝等(なれど	イマシタチ	汝等(いまし
廻	もとホシ	めぐらし	モトほし	廻(もとほ)し	廻(もとほ)し	廻(もとほ)し	モトホシ	廻もとほし
八門	ヤカド	八つの門(か	やかど	八つの門	八門(やかど	八門(やかど	ヤツノカド	八門(やかど
八佐受岐	ヤサズキ	八つのさずき	やさずき	八つの假腋	八(や)さずき	八(や)さずき	ヤツノサズキ	八(や)さずき
待	マチテよ	待て	待て	待ちてよ	待ちてよ	待ちてよ	マチテヨ	待て
告	のりタマヘル	告(の)らし	告(の)りませ	告(の)りたま	告(の)りたま	告(の)りたま	ノリタマヘル	告(の)りたま
設備	設(マケ)備	設(もう)け備	設備(ま)けて	設(ま)け備へ	設(ま)け備へ	設(ま)け備へ	マケソナヘテ	設(ま)け備へ
如言来	設(マケ)備	言(こと)の如	言(コト)ノ如	言ひしがごと	言(こと)のこ	言ひしが如	イヒシガゴト	言ひしが如
伏寝	フシイネキ	伏(ふ)して寝	伏(ふ)し寝	伏し寝たり	伏し寝(い)ね	伏し寝き	フシネタリ	伏し寝(い)ね
御佩	御(ミ)佩(ハ	御(み)佩(ハ	御佩(は)かせ	御佩(は)せる	御(み)佩(は	御(は)佩(は	ミハカセル	御(み)佩(は
切散	切りハフリタ	切り散(ちら)	切り散(ちら)	切り散(は)ふ	切り散(は)ふ	切り散(は)ふ	キリハフリタ	切り散(は)ふ
變	マヒシカ	ししか	しませ	りたまひしか	りたまひしか	りたまひしか	マヒシカ	りたまひしか
切其中尾時	ナリ	変(かは)り	変(かは)り	變(なり)り	變(なり)り	變(なり)り	ナリ	變(なり)り
	切其(その)中	其の中の尾を	其ノ中ノ尾を	その中の尾を	その中の尾を	その中の尾を	ソノナカノヲ	その中の尾を
	(ナカ)の尾	切りし時に	切ります時	切りたまふ時	切りたまひし	切りたまひし	ヲキリタマフ	切りたまひし
	(ヲ)キリタ		(トキ)		時	時	トキ	時
	マヒシ(時)と							
	キニ							
毀	毀(カ)けキ	毀(こ)れキ	毀(か)ケたり	毀(か)けキ	毀(か)けキ	毀(か)けキ	カケキ	毀(か)けキ
思	おもホシ	思ひ	おもほし	思ほし	思ほし	思ほし	オモホシ	思ほし
見者	見(ミ)そコナ	見れば	見れ者	見そなはしし	見(み)そこな	見たまへば	ミソナハシシ	見たまへば
白上	ハセ)者(ハ)	白(まを)し上	白(まを)し上	かば	はせは	見たまへば	カバ	見たまへば
是者	マヒキ	(あ)げキ	(あ)げましキ	ひき	ひき	ひき	マヒキ	ひき
	是(二)者(ハ)	是(これは	是(三)者(は	こは	こは	是(二)は	コハ	是(二)は

① 余、速須佐之男命詔<sub>ニ</sub>其老夫<sub>一</sub>、「是、汝之女者、奉<sub>ニ</sub>於吾<sub>一</sub>哉。」。② 答白、「恐。亦、不<sub>レ</sub>覺<sub>ニ</sub>御名<sub>一</sub>。」。③ 余、答詔、「吾者天照大御神之伊呂勢者也。自<sub>レ</sub>伊下<sub>三</sub>故、今自<sub>レ</sub>天降坐也。」。④ 余、足名椎・手名椎神白、「然坐者恐。立奉。」。⑤ 余、速須佐之男命、乃於<sub>ニ</sub>湯津爪櫛<sub>一</sub>取<sub>ニ</sub>成其童女<sub>一</sub>而、刺<sub>ニ</sub>御美豆良<sub>一</sub>、告<sub>ニ</sub>其足名椎・手名椎神<sub>一</sub>、「汝等、釀<sub>ニ</sub>八塩折之酒<sub>一</sub>、亦作<sub>ニ</sub>廻垣<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>其垣<sub>一</sub>作<sub>ニ</sub>八門<sub>一</sub>、毎<sub>レ</sub>門結<sub>ニ</sub>八佐受岐<sub>一</sub>、此三字以<sub>レ</sub>置<sub>ニ</sub>酒船<sub>一</sub>而、毎<sub>レ</sub>船盛<sub>ニ</sub>其八塩折酒<sub>一</sub>而待。」。⑥ 故、随<sub>レ</sub>告而、如<sub>レ</sub>此設備待之時、其八俣遠呂智、信如<sub>レ</sub>言来。⑦ 乃毎<sub>レ</sub>船垂<sub>ニ</sub>入己頭<sub>一</sub>飲<sub>ニ</sub>其酒<sub>一</sub>。⑧ 於<sub>レ</sub>是、飲醉留伏寝。⑨ 余、速須佐之男命拔<sub>下</sub>其所<sub>ニ</sub>御佩<sub>一</sub>之十拳釵<sub>上</sub>、切<sub>ニ</sub>散其蛇<sub>一</sub>者、肥河、變<sub>レ</sub>血而流。⑩ 故、切<sub>ニ</sub>其中尾<sub>一</sub>時、御刀之刃毀。⑪ 余、思<sub>レ</sub>惟以<sub>ニ</sub>御刀之前<sub>一</sub>、刺割而見者、在<sub>ニ</sub>都牟羽之大刀<sub>一</sub>。⑫ 故、取<sub>ニ</sub>此大刀<sub>一</sub>思<sub>ニ</sub>異物<sub>一</sub>而、白<sub>ニ</sub>上於天照大御神<sub>一</sub>也。⑬ 是者草那藝之大刀也。那藝二字以<sub>レ</sub>音。

## 各文の書き下しとその注釈

① 余、速須佐之男命詔<sub>ニ</sub>其老夫<sub>一</sub>、「是、汝之女者、奉<sub>ニ</sub>於吾<sub>一</sub>哉。」。

\*二爾、速須佐之男命、其の老夫に<sub>ニ</sub>詔さく、「\*三是、\*四汝が女は、\*五吾に<sub>ニ</sub>奉らむや。」。

② 答白、「恐。亦、不<sub>レ</sub>覺<sub>ニ</sub>御名<sub>一</sub>。」。

答へて白さく、「恐し。亦、御名を覺らず。」。

③ 余、答詔、「吾者天照大御神之伊呂勢者也。自<sub>レ</sub>伊下<sub>三</sub>故、今自<sub>レ</sub>天降坐也。」。

爾、答へ詔さく、「吾は天照大御神の伊呂勢者なり。故、今天より降りましぬ。」。

④ 余、足名椎・手名椎神白、「然坐者恐。立奉。」。

爾、足名椎・手名椎の神白さく、「然坐さば恐し。立奉らむ。」

⑤ 余、速須佐之男命、乃於<sub>ニ</sub>湯津爪櫛<sub>一</sub>取<sub>ニ</sub>成其童女<sub>一</sub>而、刺<sub>ニ</sub>御美豆良<sub>一</sub>、告<sub>ニ</sub>其足名椎・手名椎神<sub>一</sub>、「汝等、釀<sub>ニ</sub>八塩折之酒<sub>一</sub>、亦作<sub>ニ</sub>廻垣<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>其垣<sub>一</sub>作<sub>ニ</sub>八門<sub>一</sub>、毎<sub>レ</sub>門結<sub>ニ</sub>八佐受岐<sub>一</sub>、此三字以<sub>レ</sub>置<sub>ニ</sub>酒船<sub>一</sub>而、毎<sub>レ</sub>船盛<sub>ニ</sub>其八塩折酒<sub>一</sub>而待。」。

爾、速須佐之男命、乃ち湯津爪櫛に其の童女を取り成して、御美豆良に刺し、其の其足名

\*「し<sub>レ</sub>かして」や「し<sub>レ</sub>かくして」とも読めるが、時代別国語大辞典に本箇所が用例にあがつている（「すなはち。そこで。ここに。ことばを起<sub>レ</sub>すときに用<sub>レ</sub>ぐ」（p.234）とある）「かれ」を採用する。ただし、③の「故」と、意味と音が重複する。また、余と爾は異体字。

\*ニク語法はア段音にクが下接することが多い？↓惜しけく（万葉・3744）（沖森 2010pp.76-77）

\*「い」とも読めるが、「い」は「ユが明らかにある対象を指示する代名詞的用法をみなす。」（時代別 p.285）と説明されており、この場合は、「汝の女」を指していると解釈できるため、「話し手に近い対象を指示する」（時代別 p.314）「これ」と読む。

\*四の後、「奉」という謙譲語が台詞中に用いられることから、須佐之男命は「其老夫」を格下だと捉えていることがわかる。そのため、「二人称。親しい者・目下の者などに使う。」（時代別 p.512）だと説明される「な」をあてるのがよい。

\*五「あ」とよむ注釈書もあるが、同じ記神代に「阿はもよ女にしあれば汝を除て男はなし汝を除て夫はなし」とあるため、今回は「あれ」を採用する。

\*六尊敬語に、「尊者が飲食する意」（時代別 p.431）があり、この例は記神代に「豊御酒多豆麻都良せ」（同）とあることから、これと区別し、本字には「まつら」をあてる。また、④に「立奉」とあるから、これとも区別すべく、右記の通りにする。

椎・手名椎の神に告さく、「汝等、八塩折の酒を醸み、亦垣を作り廻し、其の垣に八門を作り、門毎に八佐受岐を結び、其の佐受岐毎に酒船を置きて、船毎に其の八塩折の酒を盛りて待て。

⑥故、随告而、如此設備待之時、其八俣遠呂智、信如言来。  
故、告しし随に、如此設備へて待つ時に、その八俣遠呂智、信に言が如来つ。

⑦乃毎船垂入己頭飲其酒。  
乃ち船毎に己が頭を垂れ入れ、その酒を飲みき。

⑧於是、飲醉留伏寝。  
是に、飲み酔ひて留まり伏し寝ねき。

⑨余、速須佐之男命拔其所御佩之十拳劔、切散其蛇者、肥河、變血而流。  
爾、速須佐之男命、其の御佩かせる十拳劔を抜き、その蛇を切り散れば、肥河、血に變りて流れき。

⑩故、切其中尾時、御刀之刃毀。  
故、その中の尾を切りし時、御刀の刃毀れき。

⑪余、思恠以御刀之前、刺割而見者、在都牟羽之大刀。  
爾、怪しく思ひ、御刀の前を以て、刺し割きて見れば、都牟羽の大刀在り。

⑫故、取此大刀思異物而、白上於天照大御神也。  
故、此の大刀を取り、異物に思ほして、天照大御神に白し上げき。

⑬是者草那藝之大刀也。  
是は草那藝の大刀なり

。那藝二字  
以し音。

\*一時代別国語大辞典に、「タチにくらべると、それより比較的卑しく、目下の者についていったもののようである。」とあるため、「ども」を採用する。

\*二「まわし」「めぐらし」とも読めるが、時代別国語大辞典には、「もとほす」に本箇所  
の用例があるため、これを採用する。「巡らす」の意である。

\*三「やつ」とも読めるが、その場合つは助数詞であり、「や」と「つ」は別の語となり、  
「八頭」「也津」「八枚」「八竿」「八箇」のように、二字で表記されるべきである、

\*四「言ひし」と読む注釈書もあるが、過去の助動詞「し」を補っており、今回は極力語  
を補わずに読むため、こちらは採用しない。

\*五「なりて」とする注釈書が多いが、少なくとも時代別国語大辞典の「なる」に変の字  
が無いいため、そのまま「かはりて」と読む。

\*六「かけ」とする注釈書が殆どであるが、時代別国語大辞典の「かく」の説明に、「上代  
の確例はない。」(p.180)とあるから、いいでは「こほる」の活用をあてる。



今回考察の対象にするのは訓読の寛容性である。古事記は漢文体で書かれてあるため、訓読する際には付属語や活用を訓読者が補う必要がある。しかし、言葉を補う行為は、原文を變形させる。本稿で訓読文作成の基本的態度として、「本文にない助詞・助動詞等を極力補わず、可能な限り本文にある語だけでよめる訓をあて」ることをはじめに宣言した。

しかし、注釈書の中には多分に尊敬の補助動詞や助動詞を補うものがあつた。

漢文体の文を訓読する際の語の補填はどの程度寛容されるのであろうか。

順当に考えれば、原文の意味を変えない範囲だろう。では、次の文は同じといえるか。

切其中尾時（白文）
その中の尾を切りたまひし時に（テキストの書き下し）
其の中の尾を切りし時に（新全集）
其ノ中ノ尾を切ります時（思想大系）
その中の尾を切りたまふ時（岩波文庫）
その中の尾を切りたまひし時（新潮集成）
その中の尾を切りたまひし時（古事記注釈）
ソノナカノヲキリタマフトキ（古事記伝）
その中の尾を切りたまひし時（全集）

過去の助動詞「し」の有無や位置が異なり、また、「たまふ」は原文にないが補われている。これらは同じといえるのか。

また、他にも、上代の語彙大系に準じて語が補われているかどうかも重要であろう。

白文にない「たまひ」を補っているが、時代別国語大辞典には「賜・給」の字があてられており、文脈は不明だが本文中に「給」「賜」は多数登場する。ここにはこの二字の両方ともないため、「たまひ」を補うのは適切とは言えないように思われる。

しかし、見方を変え、須佐之男命の行為には尊敬語を補うという見方をすれば、字の有無に関わらず、その方が日本語文には適しているように思われる。

現時点ではいったん乱暴にイデオロギーの語で寛容の度合いを片付けようと思うが、この寛容の適用範囲について果たして妥当性を論じることが可能なのだろうか。

また、これは訓読だけにとどまらず、翻訳行為への哲学的問いであるようにも思われる。イデオロギー闘争に陥らない議論があれば是非学びたい所存である。

## 出典・参考文献

- 山口佳紀・神野志隆光 校注・訳（一九九七）『新編日本古典文学全集 1 古事記』小学館  
 西郷信綱（二〇〇五）『古事記注釈』筑摩書房  
 西宮一民（一九七九）『新潮日本古典集成（第二七回）古事記』新潮社  
 幸田成友（一九二七）『古事記』岩波書店  
 青木和夫・石母田正・小林芳規・佐伯有清 校注（一九八二）『日本思想体系 1 古事記』岩波書店  
 萩原浅男・鴻巣隼雄 校注・訳（一九九八～一九版）『日本古典文学全集 1 古事記 上代歌謡』小学館  
 大野晋 編（一九六八）『本居宣長全集 第九卷』筑摩書房  
 上代語辞典編修委員会 編『時代別国語大辞典 上代編』三省堂

## 【訓読文】

爾、速須佐之男命、詔<sub>ニ</sub>其老夫<sub>一</sub>、是、汝之女者、奉<sub>ニ</sub>於吾<sub>一</sub>哉。答白、恐。亦、不<sub>レ</sub>覺<sub>ニ</sub>御名<sub>一</sub>。爾、答詔、吾者、天照大御神之伊呂勢者也。自<sub>レ</sub>伊下<sub>三</sub>字以<sub>レ</sub>音。故、今自<sub>レ</sub>天降坐也。爾、足名椎・手名椎神白、然坐者、恐。立奉。爾、速須佐之男命、乃於<sub>ニ</sub>湯津爪櫛<sub>一</sub>取<sub>ニ</sub>成其童女<sub>一</sub>而、刺<sub>ニ</sub>御美豆良<sub>一</sub>、告<sub>ニ</sub>其足名椎・手名椎神<sub>一</sub>、汝等、釀<sub>ニ</sub>八塩折之酒<sub>一</sub>、亦、作<sub>ニ</sub>廻垣<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>其垣<sub>一</sub>作<sub>ニ</sub>八門<sub>一</sub>、毎<sub>レ</sub>門結<sub>ニ</sub>八佐受岐<sub>一</sub>、此<sub>三</sub>字以<sub>レ</sub>音。每<sub>ニ</sub>其佐受岐<sub>一</sub>置<sub>ニ</sub>酒船<sub>一</sub>而、毎<sub>レ</sub>船盛<sub>ニ</sub>其八塩折酒<sub>一</sub>而、待。故、随<sub>レ</sub>告而如此設備待之時、其八俣遠呂智、信如<sub>レ</sub>言来、乃毎<sub>レ</sub>船垂<sub>ニ</sub>入己頭<sub>一</sub>、飲<sub>ニ</sub>其酒<sub>一</sub>。於是、飲醉留伏寝。爾、速須佐之男命、拔<sub>下</sub>其所<sub>ニ</sub>御佩<sub>一</sub>之十拳劍<sub>上</sub>、切<sub>ニ</sub>散其蛇<sub>一</sub>者、肥河、變<sub>レ</sub>血而流。故、切<sub>ニ</sub>其中尾<sub>一</sub>時、御刀之刃、毀。爾、思<sub>レ</sub>怪、以<sub>ニ</sub>御刀之前<sub>一</sub>刺割而見者、在<sub>ニ</sub>都牟羽之大刀<sub>一</sub>。故、取<sub>ニ</sub>此大刀<sub>一</sub>、思<sub>ニ</sub>異物<sub>一</sub>而、白<sub>ニ</sub>上於<sub>ニ</sub>天照大御神<sub>一</sub>也。是者、草那芸之大刀也。那芸二字以<sub>レ</sub>音。

## 【書き下し文】

爾<sub>しか</sub>くして、速須佐之男命、其の老夫に詔<sub>のりたま</sub>ひしく、「是の、汝が女は、吾に奉らむや」とのりたまひき。答へて白<sub>まを</sub>しく、「恐し。亦、御名を覚<sub>さと</sub>らず」とまをしき。爾<sub>しか</sub>くして、答へて詔<sub>のりたま</sub>ひしく、「吾は、天照大御神のいろせぞ。故、今天より降り坐しぬ」とのりたまひき。爾<sub>しか</sub>くして、足名椎・手名椎の神の白<sub>まを</sub>しく、「然坐さば、恐し。立て奉らむ」とまをしき。爾<sub>しか</sub>くして、速須佐之男命、乃ち湯津爪櫛に其の童女を<sub>そ</sub>取り成して、御みづらに刺して、其の足名椎・手名椎の神に告<sub>の</sub>らしく、「汝等、八塩折の酒を釀<sub>か</sub>み、亦、垣<sub>かき</sub>を作り廻し、其の垣に八つの門を作り、門ごとに八つのさずきを結び、其のさずきごとに酒船<sub>さかふね</sub>を置きて、船ごとに其の八塩折の酒を盛<sub>も</sub>りて、待て」とのらしき。故、告<sub>のら</sub>しし随<sub>まにま</sub>に如此<sub>かく</sub>設<sub>そな</sub>け備へて待つ時に、其の八俣のをろち、信<sub>まこと</sub>に言<sub>こと</sub>の如く来て、乃ち船ごとに己<sub>おの</sub>が頭<sub>かしら</sub>を垂<sub>た</sub>れ入れ、其の酒を飲<sub>の</sub>みき。是に、飲<sub>の</sub>み酔<sub>よ</sub>ひ留<sub>とどま</sub>り伏<sub>ふ</sub>して寝<sub>い</sub>ねき。爾<sub>しか</sub>くして、速須佐之男命、其の御佩<sub>は</sub>かしせる十拳<sub>とつか</sub>の劍を抜<sub>ひ</sub>き、其の蛇<sub>へび</sub>を切り散<sub>ち</sub>らししかば、肥河<sub>ひのかは</sub>、血<sub>ち</sub>に變<sub>かは</sub>りて流<sub>か</sub>れき。故、其の中の尾<sub>なか</sub>を切りし時に、御刀<sub>みは</sub>の刃<sub>は</sub>、毀<sub>こ</sub>れき。爾<sub>しか</sub>くして、怪<sub>あや</sub>しと思<sub>おも</sub>ひ、御刀<sub>みは</sub>の前<sub>さき</sub>を以<sub>もち</sub>て刺<sub>さ</sub>し割<sub>さ</sub>きて見<sub>み</sub>れば、九<sub>こ</sub>つむ羽<sub>は</sub>の大刀<sub>たち</sub>在<sub>あ</sub>り。故、此の大刀を取り、異<sub>け</sub>しき物と思<sub>おも</sub>ふ。

\*一「天より」は、さきに足名椎が「僕は、国つ神」といったことと対応する。

\*二神聖な爪櫛。↓四五頁注九（ユツは「神聖な」の意。ツマクシは頭部の側面にさす櫛の意か。）

\*三少女を櫛としたということ。後に「御手を取らしむれば、即ち立氷に取り成し、亦、劍の刃に取り成し」とある（一〇九頁）。要は、少女をそのまま櫛に変えたということであり、小さく変えたのではない。須佐之男命の大きさを印象づけるもの。なぜ櫛にするのかという点にちては、櫛に悪鬼を払う呪力があるとする説もあるが、櫛名田比売という名の櫛からの連想とみるのが穏当か。

\*四何度も繰り返して醸造した酒。強い酒であり、大蛇を酔わせるためには、その強さが必要だった。

\*五仮に設けた棚のこと。後にサジキとなる。

\*六船型の大きな器。

\*七前に「今、其が来べき時ぞ」と老夫が言った通りに、の意。

\*八川全体が血の川となったという表現によつて、蛇の大きさが具体化されるとともに、それを一気に斬り散らした須佐之男命の力も同時に印象づけられる。

\*九「都牟刈」とする本があり、それだとツムガリとなる。ツムハ・ツムガリをめぐって諸説あるが、定説はなく、未詳。

ひて、<sup>二</sup>天照大御神に白し上げき。<sup>一</sup>是は、<sup>三</sup>草那芸之大刀ぞ。

【現代語訳】

そこで、速須佐之男命はその老人に「このお前の娘は私に献上するか」と仰せられた。老人は答えて、「おそれ多いことです。しかしまた、あなたのお名前を存じません」と申した。そこで、速須佐之男命は応えて、「私は天照大御神の同母の弟である。そして、今、天からお降りになったのだ。」と仰せられた。すると、足名椎・手名椎の神は、「さようでいらつしやいますならば、おそれ多いことです。娘を差し上げましょう」と申した。そこで、速須佐之男命はその娘をたちまち神聖な爪櫛に変えて、御みずらに刺し、足名椎・手名椎の神に告げて、「お前たちは、何度も醸造した強い酒を造り、また垣を作りめぐらし、その垣に八つの入り口を作り、その入り口ごとに飯の棚を設け、その棚ごとに船型の酒の器を置き、器ごとに何度も繰り返し醸造した強い酒を盛って待て」と仰せになった。それで仰せのとおりにして、そのように作り準備して待っていると、その八俣のおろちが、本当にさきほどの言葉どおりにやって来て、ただちに船型の大きな器ごとに自分の頭を垂らし入れて、その酒を飲んだ。そして、酒を飲んで酔い、その場で突つ伏して寝てしまった。そこで、速須佐之男命は、腰に帯びられた十拳の剣を抜き、その蛇を斬り散らしたところ、肥の河は血の川となって流れた。そして、その蛇の中ほどの尾を斬った時に、御刀の刃が欠けた。そこで、不審に思つて御刀の切っ先で刺し、裂いて見てみると、つむ羽の大刀があつた。それで、この大刀を取つて、希有なものと思い、天照大御神に申してこれを献上した。これは草なぎの大刀である。

【出典】

山口佳紀・神野志隆光 校注・訳（一九九七）『新編日本古典文学全集一 古事記』小学館七〇一七二ページ

\* 天照大御神のもとに送られたこの剣は、後に邇々芸命の降臨にあたつて、八尺の勾玉、鏡とともに、天照大御神から邇々芸命に授与された（一一五頁）。

\* 二草なぎの大刀は後に東征に赴く倭建やまとたける命に授けられた。そして、倭建命が相武さがむの国造にあざむかれ、野の中に導かれて火をつけられた時、この剣で草を刈り払い、向かい火をつけて難を逃れたという（二二五―七頁）。「草なぎの剣」ゆえ、草を刈り払うということとなる。名が働きとなるという次第だが、名は既にここで与えられているわけである。ただし、「草なぎ」と命名された由来は語られていない。なお、『書紀』景行四十年是歳には、日本武尊やまとたけるのみことが草をないで難を逃れたゆえに剣の名を「草なぎ」と呼ぶのだとあり、『記』とは異なる。